白樺で持続可能な産業と森をつくる

「一般社団法人白樺プロジェクト」設立

成長が早く、身近な道産材へ
フローリングなど住宅建材に活用

2018年に発足した官民連携の「白樺プロジェクト」が、3月1日に一般社団法人白樺プロジェクト（旭川市）と改め法人化した。同社は、北海道の原風景というべき「白樺」を地域資源として活用し、森から始まる持続可能な産業とすることを目指している。白樺の利活用の研究を進め、プロジェクトの土台を作った（地独）北海道立総合研究機構森林研究本部林産試験場の秋津裕志主幹に展望を聞いた。

■白樺を資材にする

白樺は道民にとってなじみ深い樹木だが、これまで木材としてほとんど活用されていなかった。広葉樹の優良銘木といわれるナラやタモに比べ幹が細い白樺は、資源価値がないと思われてきた。しかし、良質なナラやタモが激減し、森林保護のため伐採が控えられるようになった。

そのため、道内における広葉樹の新たな活用を模索してきた林産試験場の秋津主幹は、「白樺は資源量が多く、更新もしやすい。これからの活用が期待できる」として研究に着手した。

その一環として白樺を使った付加価値の高い商品を作ろうと、試験場のある旭川市近郊で盛んな家具作りの工房と連携。活用を広げるため有志が集まり、18年に立ち上げたのが「白樺プロジェクト」だ。今年3月1日に一般社団法人となり、新しいスタートをきった。

白樺の活用を進める秋津裕志主幹

代表理事は、木と暮らしの工房（東川町、家具メーカー）の鳥羽山聡氏。副理事に、樹凛工房（美瑛町、家具メーカー）の杉達浩昭氏とアーケン（旭川市、工務店）の藤原立人氏。グラフィックデザインのパパスデザイン（旭川市、田中定文代表）に事務局をおく。

■白樺の森を育てる

白樺は流通量が多くなく、計画的に植えられたり、手入れされたりすることもなかった。

道路脇に白樺の林が形成されているのを見かけるが、森を切り開いて道路を作ると、剥き出しになった地面に真っ先に生えてくるからという。

秋津氏は、「白樺は荒地でも育つほど強くて成長が早い。ナラやタモは200年かかるが、白樺は50年程度で使えるようになる。白樺が生える環境を積極的に作って更新を促せば、資源として良質な木に育つ」と話す。

■LVLで住宅建材

「内装や造作、フローリングなど建築材として利用するには、LVL（単板積層材）にするのがいいと考えている」と秋津氏。従来、広葉樹は幹が太いものを切り出し、無垢材で使ってきた。製材する目安は直径24㎝以上という。しかし、白樺は更新が早い代わりに太いものが少ない。

「推定だが直径24㎝以上の白樺は1割ほどで、14～24㎝未満が6割を占める。この6割を有効利用するのに、ロータリー切削して積層する。そうすれば細い木材でも幅広の建材にできる」

また、「木目の主張があまりないので、積層が分かりづらく、自然な木の風合いが出る」ともLVLに向いているという。そのうえで、「高級材ではない広葉樹として一般に流通させ、多くの需要を喚起したい」と期待を寄せる。

■北海道ブランドへ

これまでの大きな取り組みとして、19年6月に「旭川デザインウィーク2019」で初の展示会出展を果たした。展示スペースの造作には、住宅建材としての白樺の床材や羽目板などが用いられた。出展物は、幹を使ったクラフト作品、樹液の飲料水や化粧水など、白樺のすべてを生かしている。今年開催の「旭川デザインウィーク2020」にも出展する予定だ。

19年11月には、東京ビッグサイトで開催された「インテリアライフスタイルリビング」に出展し、多くの注目を集めた。

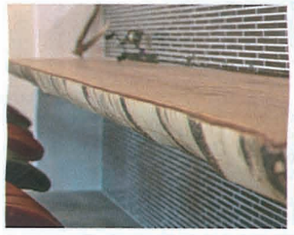
「本州の人たちは、白樺は北海道の木というイメージが強い。北海道ブランドとして認知されれば、道内より道外のマーケットが大きくなるのでは」と秋津氏。今後も道内外でイベントを行い、周知を図っていくという。

■産業と森林の再生

白樺プロジェクトは、コンセプトに「森から始まる」という言葉を掲げている。秋津氏は、「森林王国の北海道は、森から始まらないと地域が活性化しない」と提起する。

白樺を育てる林業、加工する企業、商品化するものづくりの人たち。そうした一連の流れが、持続可能な産業を地域に根付かせるという。それは同時に森林の再生にもつながる。

鳥羽山代表理事は、「白樺は北海道ならではの持続可能な地域資源。白樺プロジェクトを法人化することにより、50年以上も安定して利用できる環境を整える」と法人化のビジョンを語った。

白樺が身近で手頃な道産材になる日は、そう遠くないかもしれない。

白樺の森と白樺で作った家具